

京都の天文学【6】

星のしるしと清明桔梗 捕逸：『更級日記』の人魂

臼井 正（京都学園大学）

1. 「ほし」の付く言葉

東洋では長い間、星を表すシンボルは、☆ではなく○でした。そこで、日本語の「ほし」も、小さな丸い点を意味しています。相撲の白星・黒星やナナホシテントウムシ、碁盤上の 9 つの黒点、かぶとの板に打ちつけた鋌（びょう）の頭などは、いずれも「ほし」です。『平家物語』にも、「雲井をてらすいなづまは、甲（かぶと）の星をかかやかす」という用例があります。

又、馬の額にある白い斑点も星で、星月（ほしづき）、星額（ほしびたい）、月白（つきしろ）、月額（つきびたい）などとも呼ばれ、平安時代の漢和辞典『和名類聚抄（わみょうるいじゅしょう）』にも「保之都岐乃宇未（ほしつきのうま；漢語では落星馬）」という言葉が載っています。また、他の動物の白斑も同様で、「保之未多良（ほしまだら；星のような斑点のある牛）」という言葉もあります。『今昔物語』巻二十八・三十七には、花山院の御所に勝手に入ってきた男の描写として「夏毛の行騰（むかばき）の星付（ほしづき）白く色赤きを履たり、」とあります。ここにある行騰とは馬に乗る時につける足の前部の覆いで、鹿の夏毛は白斑が鮮やかになるとのことです。日本で星を☆で表すようになったのは、江戸時代に西洋の影響を受けてからのことです。ただ、英語でも馬の額の白い毛は **star** で、中世からの用例が知られているので、日本と西洋では星のしるしは違うものの、この点に関しては同じ表現なのは面白いところです。

2. 祇園祭の星

祇園祭は、貞観十一（869）年、京中に疫病が流行したとき、神泉苑に六十六本の矛を立て、祇園社（現在の八坂神社）の御輿（みこし）を迎えて疫神の退散を祈ったことに始まります。本来の矛は一人の人間が肩に担いで持ち歩けるほどの大きさでしたが、14 世紀ころから矛と山車とが合体し

て大型化し、町衆の力によって制作、維持されてきました。そんな祇園祭の山鉾の一つ、長刀鉾の天井にも星が描かれています。長刀鉾の名は、鉾のてっぺんに大長刀を飾ることによります。祇園祭のハイライトである山鉾巡行の順序は毎年クジによって決められますが、長刀鉾だけはクジを引かず常に先頭を行き、唯一お稚児さんが乗って鉾縄（しめなわ）切りをして巡行が始まります。

図1は、山鉾巡行の前日にちまきを買って長刀鉾の上に登らせて頂いた時のものです。登れるのは男子のみですが、地上から鉾を見上げて一部見ることができます。天井の周囲は28に区画分けされて、そこに中国の二十八宿が緋毛氈（ひもうせん）の上に銀鉾で打たれ、黒漆塗りの細棒でつながれています。図1の左下奥から、畢（ひつ）宿（「く」形をしている；ヒアデス星団）、觜（し）宿（オリオン座の頭）、参（しん）宿（参宿はオリオン座の三つ星ですが、それに加えて、オリオン座の四角形も描かれています）、昴（ぼう）宿（ジグザグ形；プレアデス星団）が見えています。ここでも、星は○で表されています。



図1 長刀鉾の天井の二十八宿

3. 晴明紋の由来

ペンタグラム（五芒星）は日本では晴明桔梗、晴明紋、セーマン（晴明が変化したものとされています）などといえます。日本で星といえば○なので、この紋も晴明や桔梗といった、星以外のものと結びつけられています。以下では、この紋を晴明紋と呼ぶことにします。

陰陽五行説では、世界の構成要素は木、火、土、金、水の五つで、それらの循環によって色々な変化を説明します。そこで、晴明紋はこの原理を表現した



図2 名田庄村の土御門殿・天社宮のお札

ものとされます。図 2 は、福井県名田庄村の土御門殿・天社宮のお札ステッカーです。安倍清明を出した安倍家は戦国時代に土御門家と名前を変え、応仁の乱を避けて、荘園のあったこの地に移り住みました。戦国時代が終わると当主は京都へ戻りましたが、現在も土御門殿の屋敷があって、隣接する曆会館では土御門家と曆に関する資料が展示されています。図 2 の清明紋は京都の清明神社のものとは少し違って、2 本線が立体交差しているように描かれています。

4. 真如堂と清明紋

京都の洛東にある真如堂では、清明の念持仏とされる不動明王が本尊の脇に立っていて、清明紋の入ったお札も配られています(図 3)。そのお札の由緒書には、次のような話が書かれています。

清明が死んだとき、不動明王が閻魔(えんま)大王の宮殿に行き、「この者は寿命が来て死んだのではない。横死(不慮の死)であるから再び娑婆(しゃば)へ返してほしい」と頼みました。閻魔大王は承知して清明に、「これは私の秘印で、現



図 3 真如堂のお札

世では横死から救い、来世では往生がかなうものである。この印はお前一人のために渡すのではないから、娑婆に持ち帰ったら、この印を施して人々を導け」と言いました。清明がこれを受け取るとたちまち蘇生して、懐中を見るとこの金印がありました。清明はこの後、八十五歳まで生き、生涯この印を人々に施し、死後に、不動明王と蘇生の印は、真如堂に納められました。

大永四年(1524)に成立した『真如堂縁起絵巻』には、この清明の不動像に関する後日談があります。

清明の子孫である安倍有清が、「真如堂の不動像は清明(原文では清明)の持ち物だから返してほしい。」と天皇に頼んで、この不動像を運び出させました。まず天皇に見せるために御所へ向かいましたが、封を切って箱を開けると中は空っぽで、真如堂のお堂の中を調べると、不動像はも

との場所にいらっしやったので、不動像はそのまま真如堂に安置されることになりました。

これは真如堂の仏像の縁起なので、真如堂に有利な話になっていて、清明紋についても言及していませんが、このように清明は仏教にも取り込まれているのです。

捕逸 『更級日記』の人魂

人魂を辞書で引くと「夜空に空中を浮遊する青白い火の玉。古来、死人の体から離れた魂といわれる」（『広辞苑』）とあります。民俗学での目撃例では人魂の色は青、赤、黄色が多く、おたまじゃくし型か球形で、ふわふわ飛んだ、あるいはスピードが速かった、といった報告があります。人魂の正体はプラズマとも言われていますが、はっきりとは分かっていません。

人魂は『更級日記』にも登場します。「あづま路の道のはてよりも、なお奥つ方に生い出でたる人」で始まるこの作品は、菅原孝標女（すがわらのたかすえのむすめ、1008-1059年）の回想の手記です。彼女は、父親が国司をしていた上総国（千葉県）で少女時代を過ごしました。十三才で上京した後、源氏物語を読みふけり、三十三才という当時としては遅い結婚の後、出産をします。問題の人魂は作者が五十才の時、夫が国司として信濃へ赴任するところに出てきます（作者は京都に残ります）。

見送りに行った家人（けにん）たちが帰ってきて、「たいそうごりっぱにお下りでした」などと言って、「この明け方に、非常に大きな人魂が空に現れ、京の方へ飛んでいきました（この暁に大きな人だまのたちて、京ごまへなむ来ぬる）」と報告したが、私は、供の者の誰かの人魂だろうと思っていた。およそ、不吉な前ぶれなどとは思ってもみななかった。[1]その後、夫は任期半ばで京都に戻り、その翌年に亡くなりました。彼女は不吉な人魂を従者に関連したものと思いましたが、実は夫の死の前ぶれだったこととなります。この人魂の注としては、筆者が見た範囲では全て「人の魂が抜け出して飛ぶ火の玉。人の死の前兆として忌まれた」などとなっていますが、果たしてそうでしょうか。

『更級日記』の時代に近い昌泰二（899）年の記録には、未の時（午後2時ころ）、星空中より出（い）づ。東南に歴行す。遂に地に墜（お）つ。その声落雷のごとし。尾の長さ五六尺ばかり。観る者奇

怪とする。これを人魂という。 『日本紀略』

とあり、別の延長八（930）年の記録にも

流星、良（うしとら、東北）より差し渡る。俗に人魂というなり。『扶桑略記』

とあって、この時代に流星を人魂といったことが分かります。

次に、人魂の飛ぶ高さについてです。民俗学での人魂の目撃例では、人魂はあまり高いところを飛ばず、屋根の上に飛んでいった、とか、あぜ道に沿って飛んでいった、という表現がされています。古典では、人魂が「北壺呉竹のあたり（北の庭の竹が生えているところ）」に飛んだ（『明月記』）という表現がこれにあたります。これらは正体は分かりませんが、流星とは思えません。一方、『更級日記』の「京ざまへなむ来ぬる（京都の方へ飛んでいった）」という書き方は、もっと高いところを飛んだ表現のように思われます。

流星が飛んだときの表現としては、方角（東より西へ）や星座名（「七星より出づ」など）が多いのですが、中には地名を使って、

三笠山に大なる光物（ひかりもの、流星の別称）あり。『玉葉』

流星、紀伊山方に出で福原（今の神戸の地名）東北山に入る。『百練抄』という例もあります。

このように、『更級日記』の時代に流星を人魂といった例があること、「京ざまへなむ来ぬる。」という表現は民俗学での人魂より流星の方がふさわしいことから、『更級日記』の人魂は流星である可能性が高いのではないかと考えられます。

実は、『広辞苑』にも人魂のもう一つの意味として、「流星の俗称」とあります。流星と人の死を結び付ける考え方は、世界各地に見られる一方、「流星が流れている間に三回願い事を唱えると叶う」という良く聞く言い伝えは、19世紀以降の西洋で言われ始めたものが日本に入ってきたものようです[2]。

参考文献

[1] 藤岡忠美他校注、1984、『和泉式部日記 紫式部日記 更級日記』、小学館

[2] 白井正、2006、「凶兆としての流星」、『天文教育』Vol.18 No.3 p.26